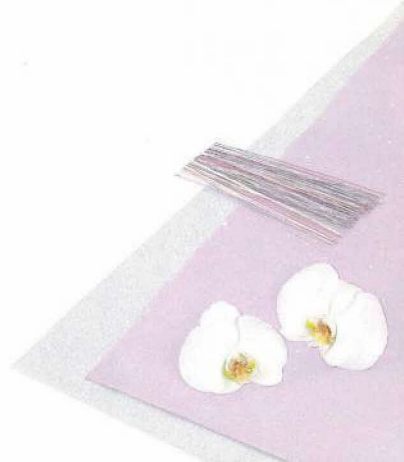


竜神のバッジ

文 西山好英
絵 平松茂二



山から遠く、はなれたところに、海につきでた細長い半島がありました。そこには、大きな川もなく、雨も少ししか降りません。ところが山には、たくさん雨が降って、川の水があふれ、水害になることも、しばしば、ありました。

水の少ない半島では、作物があまり、できないばかりか、日照になると住んでいる人たちの飲み水にも、困ってしまいました。ちやうど、10年前に、山の谷間に、ダムができ、雨が降ると、たつぷり水がたまります。

その水を野をこえ、町をこえて、半島の先つちよまで、流す用水も完成しました。

それからというものは、今まで荒地地だったところも、森だつたところも、耕されて畑にかわり、温室も、あちらこちらに、立ち並んでいます。

広くなった畑一面に、キャベツが青青と育ち、その真ん中で、スプリングラー（散水器）が、いきおいよく、ピュー・ピューと、水をまきちらしております。

飛び散った水煙で、七色のにじが、かかることも珍しくありません。

温室の中では、とても、大きくなって重そうに、ぶら下っているメロンが、見られます。

その根っこのところ
に、小さな穴のあいた
管が、敷かれており、
チヨロ・チヨロと、水
がでています。
清太郎と好兵衛は、
この用水で、働いてお
ります。

清太郎は、太つちよ
で、いつもニコニコし

ており、村の人たちか
ら大層、人気があつて、
清どん、清どんと言わ
れて、かわいがられて
おりました。

好兵衛は、やせで、どんなことをしても、きちん・きちんと、
してしまいましたので、村の人たちから大層、信用がありました。
清どんは、村のお百姓さんの家をまわって、明日、使う水の量
を聞いてくるのが、お仕事です。

「こんにちは。明日、水はどれだけ、要るのかね。」



『清どんかね。いつも、ごくろうさんです。明日は、苗をうえるで、8トンたのみますだ。』

一軒、一軒、聞いてきた水の量を足して、ダムにいろ好兵衛に、伝えるのです。

それを聞いた好兵衛は、ダムの水門をあけて、たまっていた水を流すのが、お仕事です。

水の要る時間に、ほしだけの量が、とどくよう、きちんと流し、無駄にならないように、しています。

ところが、どうしたことが、ある年、半島はもちろん、山にも雨が降りません。

雨が降らなければ、ダムに水がたまるどころか、ためていたものまでも、使うので水は、減る一方です。

来る日も、来る日も、空には、お天道さまが輝いて、雲一つ見えません。

畑は、ところどころ、ひび割れのようになり、キャベツは元氣なく、しおれて頭を大地に、くっつけています。

温室のメロンも、野球のボールほどで、なかなか、今までのように、大きく重そうに、なりません。

「こんにちは。明日、使う水を節約して、もらえんかね。」
人気者の清どんも、必死になって、お百姓さんに、たのんで、

まわっています。

「清どんかね。キャベツが枯れそうだから、明日、

10トン水を、もらいたいだ」

「今は、もうダムの水も、

少しになってきての。6ト

ンにして、もらえんかね。」

「清どんの言うことだし、

ダムの水が無くなっちゃ、

生きて、いけれんから。」

仕方がないの。」

大好きなお百姓さんたち

の悲しそうな顔を見るのが、

清どんには、つらくてたまらなかつたのです。

一生懸命、節約してもらっても、ダムの水は減り続け、とうと

う、心配していた通り、ダムは空っぽに、なってしまうました。

底に沈んでいた橋が、姿を現わし、昔の田んぼや畑が、見える

ようになりました。

あまりにも珍しいことでしたので、新聞やテレビで、大きく報道され、遠くの方からも、見物の人が、大勢集まりました。



若者たちが、ウー・ウー・ウーと音をたてて、ダム底の切り株の間を、オートバイで、かけめぐっています。

町から出動した給水車の前に、村の人たちが、列をなして並び、水の入ったバケツを、大切そうに提げて、帰って行きます。

清どんが、枯れかけたキャベツ畑の道を、涙を流しながら、オオ口歩いていると、お年寄りのお百姓さんが、声をかけてきました。

「清どんや。用水がでる前にわの。」

日照が続くと、雨ごいをしたもんや。

その仕方をの。

隣村の村長さんとこのじいさまが、よく知っておるでの。

聞いてみんしゃい。」

早速、清どんと好兵衛は、二人そろって、じいさまのところへ、行って聞きました。

「じいさま。このごろは、ちよつとも雨が降らんでの。」

作物は枯れてくるし、飲み水も、少なくなってきたの。

皆、困っちゃうが、どうしたら、いいのかの。」

じいさまは、真っ白な髪を背中まで、のばし、やはり、白くなつたひげを、なでながら教えてくれました。

「昔のことで、はつきりとは思ひ出さんのの。」

あの山の向こうに行くと、白い旗の立った西山という山が、あつての。

その神さまにお願
いして、みんしゃい。」

清どんと好兵衛は、
わかるがわる車を運転
して、西山へ向いまし
た。

山や谷をたくさん通
りこして、白い旗の見

え、かくれする山のふ
もとで、車を止めまし
た。

階段の両側には、白
い布地に白蛇大権現
と書かれた旗が、とこ
ろせましと、立ち並ん
でいました。

カサ・カサと落葉を
踏みながら登って行く



と、山の中腹に、今にも、くずれ落ちそうな小さな社がありました。

鳥居には蛇の彫り物がしてあり、神前に、お水と白い玉が、かざってありました。

その前で、目を閉じて、手を合わせると、カラカラになった地に、ひれ伏すお百姓さんの姿が、うかんでました。

悲しそうな顔をして、目には今にも、こぼれ落ちそうな涙が、光っています。

(どうか雨を降らせて下さい。

お百姓さんの生活を救って下さい。

作物や飲み水が、無くならないように、して下さい。)
何の音もしない。

シーンとした静かな時間が続く。

突然、高いところから、何かが落ちたような音がしたので、目を開けると、そこに、小さな白い蛇がいました。

頭をもち上げて、こちらを振り返り、心なしか、ほほえんでいるような気がします。

白蛇のささやく声が、かすかに、聞こえてきました。

『あなたたちのお祈りは、よくわかりました。』

だけど、私の力では、雨を降らせることは、できません。

竜神の水をダムに注いで、みなさい。」

「竜神の水は、どこに、あるのですしょうか。」

『今から、私が案内しますので、後から、ついて来て下さい。』
話が終わると、白蛇は、シウル・シウル・シウルと音をたてて

奥へ進んで行きました。

何百年も、千年も、たったかと思われる大きな木が、びっしり
並び、天に向って、高くのびています。

あたり一面は、光がさしこまず、昼でも、夕方のように、薄暗
い所です。

獣道というより、蛇道といった方が、よいようなせまい道が続

き、やがて、せせらぎの音が聞こえてきました。岩のわきを、きれいな水が流れています。

こんどは、その小川に、そって、白蛇の後を、奥へ、奥へ、進んで行くと、大きな扉のある門に、つきました。

こんな山奥に、何で門があるのだろうか？と不思議に思い、気をとられているうちに、いつの間にか、白蛇は見えなくなつてしまいました。

キー・キーと扉を開けて、中に入ると、正面に滝がありました。水が流れ落ちる両側に、大きな細長い岩があり、お相撲さんの横網のような網が、まいてありました。

とうとう、じいさま
が言っていた竜神の滝
に、たどりついたのだ。
清どんと好兵衛は、
思わず顔を見合わせま
した。

お互いに、ズボン
は泥だらけで、上着には
くもの巣が、ついてい
ました。

「ばんざい。ばんざ
い。」

この滝の水が竜神の
水です。

早速、持ってきた水
筒に、水を一杯、入
れて帰ってきました。

待ちに待った雨ごいの行事の日が、やってきました。

近くの山の頂上に、赤いお堂が、いくつも並んでいる西園寺と
いうお寺があります。

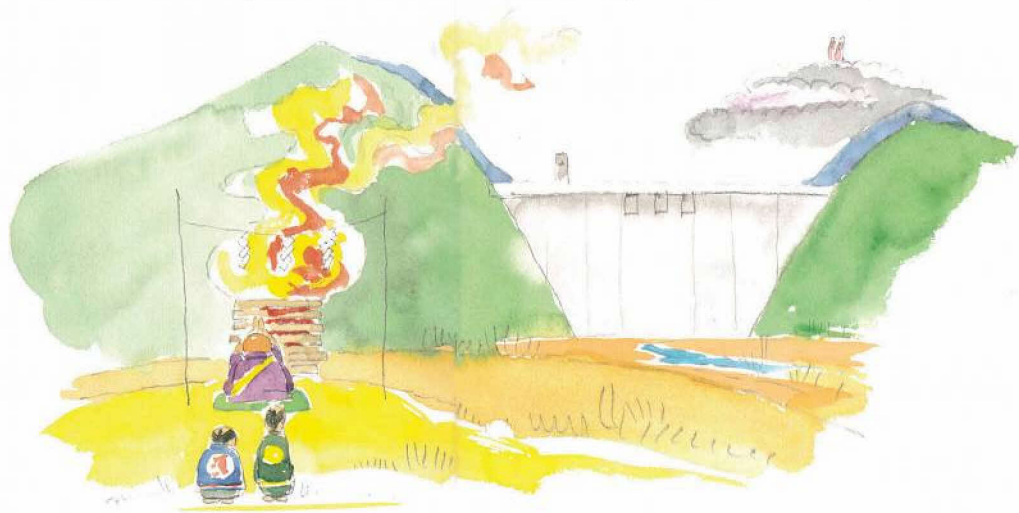


その偉いお坊さん
も、水が無くなって、
村の人たちが、大変、
困っていることを知り、
好兵衛の願いを、きき
入れて、お祈りをして
下さることに、なりま
した。

ダムの横の空き地に、
しめなわをはりめぐら

し、その中で護摩をた
き、お坊さんが、天に
向って祈り始めました。
頭を上げたり、下げ
たり、腕を左右に、大
きく開いたかと思うと、
閉じたりして、大声を
発しました。

『ハナハシャ・シンタリヤナ・リウシンオーナー・タイウー・
コーチ……。』



清どんも、好兵衛も、手を合わせて、（どうか雨を降らせて下さい。）

ダムの水が、たまるようにして下さい。お願いしますだ。）と必死ひじしになって、拝かぐみました。

護摩の火は、煙けむりが天に、とどくかのように、燃えあがり、お祈りの声は、あたりの山山に、こだました。

お祈りが済むと、お坊さんは、ダムの底へ竜神の水を注ぎました。

すると、どうでしょう。

ドオ・ドオ・ピューと風が吹き、西の方から、金色に輝やく雲

が現われ、やがて、ダムの上空で、止まりました。

その雲の後から、次から次へと、真つ黒な雲が続いて現われ、ダムの上に集まりました。

あつという間に、あたり一面は、暗闇くらやみに、なっていました。ゴー・ゴー・ザツ・ザツとすさまじい勢いで、大粒おおつぶの雨が降り始めました。

まるで、竜神の滝のようです。

もう、何も見えなくなって、雨の音だけが、はげしく聞こえてきました。

ずぶぬれに、なりながら、清どんと好兵衛は、つぶやいています。

「ありがとうのことだ。ありがとうのことだ。」

しばらくすると、西の方から、だんだん、明るくなってきました。

薄明りの中で、よく見るとダムの上に、白いものが、かすかに見えます。

雨も、すっかり止んで、姿を現わしたのは、中国の皇帝のような白い衣装をまとい、頭に、王冠をいただいた

男の人が、立っていました。

そのそばに、寄り添うようにして、やはり中国の王妃のような白い衣装をまとい、冠をいただいた女の人がいきました。

とても、美しい人だ。近づいて、よく見る



と、お二人の冠には、竜がかたどられ、手に持った白い玉がキラキラと光り輝いていました。

おもむろに、男が口を開きました。

『私たち二人は、中国・山東省に、そびえ立つ五台山の沼に住んでいる竜王と竜王妃である。』

また、竜神とも、いわれている。

あなたたちのお祈りによって、はるばる、ここまでやってきた。』
清どんと好兵衛は、声をそろえて、「遠いところから、来てくれたんだの。」

ありがとうございます。」

と言って頭を下げました。

竜王は続けて、『私たちは、世界のどこの国にでも出かけ、水の無いところに雨を降らせています。』

この地球上に、豊かな食べ物と十分な飲み水をあたえ、飢えと貧乏を無くしようとしています。』

竜王妃も、きれいな声で、お言葉を添えました。

『まだまだ、私たちが出かけ、雨を降らせて、人間を救って、あげなければならぬところが、たくさんありますのよ。』

お坊さんも手を合わせて、「ありがとうございます。」

御自分が苦勞して、人には喜んでいただくのが、菩薩の御心です。

ありがたいことです。
なむ・あみだぶつ。

「なむ・あみだぶつ。」
と言って、拝みまし

た。

最後に、竜王がおご
そかな態度で、締めく
くりました。

『私たちは、いつも、
中国の高い山の上に、

住んでいるが、地球は
丸いので、悲しいかな、
遠いところは、よく見
えない。

ここに、竜神のバツジがある。

一つは、竜王の雄竜を、かたどったものであり、もう一つは、
竜王妃の雌竜を、かたどったものである。

この二つを、合わせると、竜神にだけ見える光を発するようにな
る。

これが、水の無いことを知らせ、私たちを呼び寄せる合図となる。



これを清どんと好兵衛に、あげるが、いつもは、別別に、しまっておくように。

そして、水が無くなったときに、一緒に、しなさい。』

竜王は清どんの上着に、竜王妃は好兵衛の上着に、それぞれ、付けてくれました。

近づいてきた金色の雲に、竜王と竜王妃が乗ると、西の方に向って、飛んでいきました。

いつの間にか、一杯になったダムの水が、ひたひたと、波打っています。

清どんと好兵衛の胸には、両手で大切に、持ち上げた水滴の中

に、竜が住んでいる絵のバツジが光っていました。

それから後、ダムはいつも、満満と水をたたえています。

この用水の流れているところでは、必ず、作物がよく、できるようになり、飲み水に、困ることも、無くなりました。

畑では、スプリングラーが、シャー・シャーと音をたてて、キヤベツに水をかけています。

キヤベツも、はくさいも、大根も、生き生きとして、もう枯れることは、ありません。

温室の中では、メロンが毎年、大きく重そうになります。

でも、村の人たちは、水が無くなった年のことを、いつまでも、
忘れずに、水を大切に使っています。

そして、お百姓さんの家から「明日、水はどれだけ要るのかね。」
という清どんの陽気な声が聞こえてきます。

豊川用水と竜神さま

編集 水資源開発公団豊川用水総営管理所

〒4400 豊橋市今橋町八番地

電話(053)5416501～4

発行 勸愛知・豊川用水振興協会